

長野県立歴史館たより

2006年 **秋**号 vol.48



秋季企画展

戦時下の子どもたち

— 信州の十五年戦争 —

■ 九月三〇日(土)～十一月一二日(日)

家族とともに満州へ

一九三一年（昭和六）に起きた満州事変から一九四五年（昭和二〇）の終戦まで、日本はアジアや太平洋沿岸の国ぐにと戦争をしました。長野県民も戦争にかかわり、特に満州（中国東北部）へ約三万三〇〇〇人が移民をしました。その数は全国一です。家族全員が移民する場合があります。子どもたちも満州で生活したのです。また、長野県は東京都の学童集団疎開も受け入れています。戦争の中で子どもたちはどのような生活をしていたのでしょうか。当時の資料をもとに、子どもたちの姿を紹介します。

銃後を守る子どもたち

一九三七年（昭和一二）七月、中国との戦争が始まりました。自分の父親や友達の父親が出征するこ

ともあり、子どもたちは銃後を守ることにになりました。

出征兵士にあてた慰問文、兵士が身につけた千人針などが残っています。



慰問袋（いづな歴史ふれあい館蔵）

信州への学童疎開

一九三八年（昭和一三）頃から満州開拓の先遣隊が送られ、その後、移民が本格化しました。県内では分村として、村の約半分が移民した事例もありました。現地の国民学校も建てられ、満州の風土に適した作物をつくらうとしました。青少年義勇軍となり、ソビエト連邦（ロシア）国境付近に行った人たちもいます。しかし、一九四五年八月九日のソビエト参戦は大きな悲劇を生みました。逃げる途中で命を落とす人も多くいました。また、捕らえられシベリアに抑留される人もいました。戦後の日本では、家族の帰国を願う運動も起こりました。

終戦と復興

一九四四年（昭和一九）八月長野県は東京都からの学童集団疎開を受け入れました。親元を離れての集団生活は翌年一月までおこなわれました。学校によつては県内の別の場所へ再開することもありました。子どもたちは温泉旅館や寺院などを学寮にし、時には国民学校の校舎を使って学習しました。

一九四五年八月一五日に終戦を迎えますが、その前から食糧や物資が不足し、子どもたちは



渋温泉（山ノ内町）に疎開した子どもたち（個人蔵）

忍耐の毎日が続きました。子どもたちも畑を耕したりして、食糧増産にかかわりました。燃料不足から木炭や薪を燃やして出るガスを利用してエンジンを動かすこともありました。写真の装置は農業用ですが、これを大きくし、車にのせて、木炭車として利用しました。



木炭ガス発生装置（当館蔵）



筑摩郡西宮村年貢掛札 (文字を見やすくするため赤外線撮影した写真)

文献史料をよむ

江戸時代の年貢はどうやって納められたか

●いつの世も困ったときの増税、増税●

サラリーマン減税の廃止、消費税の見直し、国家財政や地方財政の再編など、一〇〇年の単位で見ても大きな改革がおこなわれようとしています。今回は、税問題に関心が高まっていることもあり、江戸時代の税（年貢）について考えてみたいと思います。

●農民の年貢は村でまとめて支払った●

中世後期に惣村とよばれる自治的村落が生まれ、守護大名などの領主に対し、年貢を村として請け負うようになりました。それぞれの農民は村の代表者に年貢を納め、村の代表者が領主にまとめて納めたのです。江戸時代に入ってもこのしくみは年貢徴収制度の要として引き継がれました。江戸時代の年貢徴収は、まず①年貢賦課額を決めるための検地と検見の実施、②年貢賦課額の代官から村への命令（年貢割付状）の作成と通知、③村に賦課された年貢を村役人（名主・庄屋）のもとで村内の百姓に割り付ける、④百姓が各自の年貢を村役人に納入し、その際に村役人が帳簿（年貢納帳）を作成する、⑤年貢を納めるたびに代官から村に仮領収書が発行され、⑥年貢が完納された際に、仮領収書と引き替えに代官から正規の領収書（年貢皆済

状・年貢皆済目録）が発行される、このような手続きをとりました。

●百姓に税額を知らせた年貢掛札●

ここに一枚の高札があります（写真）。今年歴史館が県外に流出した古文書を調査する中で見つけたものです。内容は松本藩預りの天領であった筑摩郡西宮村（松本市会田）が、丑年（一八世紀半ば以降ですが、今のところ年を特定できません）に幕府に納める年貢の額を記したものです。

最初の行は、「当丑定免御取箇附」、続いて「筑摩郡西宮村」とあります。「定免」とは五〇〇年を単位に一定の年貢高とする制度で、「取箇」とは年貢のことです。丑年の定免による年貢徴収という意味です。その次に、水田（田方）と畑（畑方）双方の石高と年貢額（定米）「四拾四石四斗五升六合」を示し、さらに金との換算率を示しています。

この年貢掛札は、先の①～⑥の手続きで言えば、②の年貢割付状と関連するもので、「松本御預役所」から西宮村に年貢の納入を指示し、それを村内の百姓に知らせるために作成されました。木製の高札ですので、名主宅あるいは高札場など屋外のしかるべきところに掛けられたものと思われます。紙に書かれたものはしばしば目にしますが、木製の年貢掛札はきわめて珍しいものです。これまで実物がなく、あまり関心が払われてきませんでした。江戸時代の年貢徴収のあり方を考える貴重な史料です。

常設展示室から——新小テーマのご紹介——

◆ 原始 〈二つの縄文文化〉

新小テーマでは、長野県を代表してきた八ヶ岳山麓の縄文文化と、近年の発掘調査により、地下深くから姿を現した千曲川流域の縄文文化を展示します。

八ヶ岳山麓の諏訪郡富士見町の藤内遺跡出土の神像筒形土器（重要文化財）の複製を新たに作成し展示します。この土器にはエジプトのツタンカーメンの棺にも似た縄文人たちの「神」の姿が造形されています。



複製中の神像筒形土器（井戸尻考古館蔵）

◆ 古代・中世 〈須田満親の生涯〉

川中島合戦で北信濃の武士は武田信玄に従うものと上杉謙信に従うものにわかれてきました。

高井郡の須田満親は謙信の家臣となり、ついで上杉景勝の代には上杉家重臣としておもに外交面で活躍します。

足利義昭や豊臣秀吉、徳川家康など当時の権力者との深い交流があり、とくに秀吉の信頼が厚く、豊臣姓をなれることを許され貴族の位をもらいました。海津城主として一万二千石を得た人物でありながら、あまり知られていない満親の足跡を追うことで、中世末の信濃武士の姿を浮き彫りにします。



後陽成天皇口宣案（片山光一氏蔵）

◆ 近世 〈善光寺参り〉

「善光寺如来縁起」（三幅）を二幅ずつ順次展示します。第一幅は、釈迦が大林精舎で善光寺出現の由来を説く場面から如来が百済の聖明

王に日本へ行くことを告げる場面までを描いています。第二幅は、聖明王の后が如来との別れを悲しみ入水する場面から聖徳太子が物部守屋と戦い、窮地に立たされたながらも難を逃れる場面までです。第三幅は、聖徳太子が四天王の加護を受け、守屋を討つ場面から善光寺の火災と復興、伽藍を描いています。

そのほか、江戸時代に作成されたものを中心に、「善光寺信仰の広まりに用いられた各種の「善光寺如来縁起」を公開します。また、「善光寺名所図会」や「善光寺土産」も展示し、庶民の善光寺参りのようすを紹介します。

◆ 近現代 〈信州の白樺派〉

一九一〇年（明治四三）四月、武者小路実篤らが同人誌『白樺』を創刊し、文学だけでなく、西欧の新しい美術なども紹介して、文壇や若者に新風を吹き込みました。信州では、赤羽二郎をはじめ、主に若手教師たちがこの影響を受け、白樺教育とよばれる型にはまらない授業を展開しました。赤羽の謄写版教材は、多色刷りを用いるなど、工夫のこらされたものでした。信州の白樺派教師たちの思いをこめた資料を中心として展示します。



『白樺』第1巻第2号表紙

歴史館さんぽ マイクロリーダー

閲覧室の奥、特別閲覧室の入り口

付近にあり、見過ごされがちな機械があります。今回は、その機械、マイクロリーダーをご紹介します。

マイクロリーダーは、マイクロフィルムに撮影された史料を画面に拡大して映し、読むことができるようにする機械です。画面に映した史料は、紙にコピーすることができます（有料）。マイクロフィルムとは、史料や図面などを縮小撮影して保存するフィルムで、一巻のフィルムには約七〇〇コマの撮影ができます。このようにマイクロフィルムは、大量の情報を一巻のフィルムの中におさめることができます。また、貴重な資料、破損の恐れがある史料もマイクロフィルムに撮影し、マイクロリーダーで読むことにより安心して閲覧することができます。

当館で閲覧することのできるマイクロフィルム化された史料には、主に次のようなものがあります。

- ① 東筑摩郡山形村中村太八郎家文書
- ② 明治一二年神社明細帳



③ 長野県統計書

④ 戦後刊行の新聞・時報・公民館報

この他にもマイクロフィルム化されたものがありますので、他の史料と同じように閲覧室に備え付けの目録をみて下さい。マイクロフィルム化された史料を閲覧したい場合は、閲覧室の受付にご相談下さい。初めての方には、係の者がマイクロリーダーの扱い方、コピーのしかたなどの説明をいたします。多くの方のご利用をお待ちしています。

これでなつとく！

レファレンスQ&A

質問 平成の大合併が一段落しましたが、市町村の合併の歴史について教えてください。

回答 「平成の大合併」で、県内の市町村数は八一となりました（二〇〇六年三月三十一日現在）。また、山口村は岐阜県中津川市に越県合併しました。

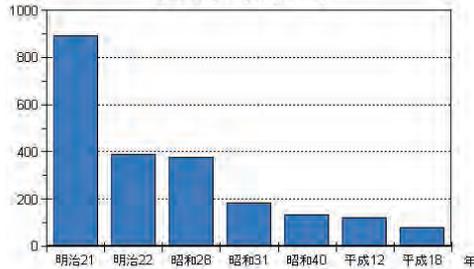
明治以降の日本では、大きな市町村合併の動きが三度ありました。最初の「明治の大合併」は一八八九年（明治二二）の市制・町村制の実施にあたり、自治に堪える町村づくりを目指したものでした。県は郡長と連絡を取り合いながら県民には秘密裏に進めようとしたが、それは難しく、方針転換をして町村会にはかりました。県の作成した合併計画には反対も多く、町村会の意見も踏まえて計画変更等をおこないました。

二度目の「昭和の大合併」は戦後の民主改革の一環としておこなわれました。それまでの中央集権的な行政システムを地方分権のシステムに変えようとする改革の中で、行政事

務を能率的に処理するために町村の規模の合理化（町村合併）を進めたのです。この際、県も積極的に合併を推進しようとしたが、なかなか順調には進みませんでした。合併に関する地域の紛争も数多く発生しました。

そして三度目が「平成の大合併」です。実は長野県内には、こうした合併の歴史にもかかわらず、王滝村などのように、江戸時代から一度も合併を経験していない村があります。地域の学校の歴史や村や町の名前を調べていくと合併の歴史が見えてくることもあります。自分の市町村の歴史を調べてみるのも楽しいですよ。

長野県の市町村数の推移



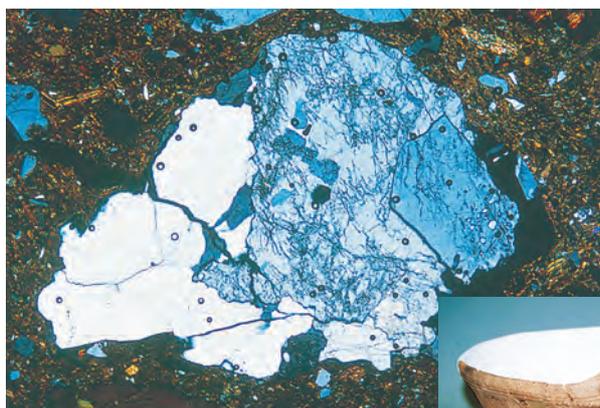
考古資料をよむ

朝日村熊久保遺跡出土土器の素材を探る

偏光顕微鏡を用いた調査事例から

土器素材の調査

考古資料チームでは長野県内から出土した土器がつくられた「地域（土器のふるさと）」を探す研究をはじめています。その方法は、土器の粘土の中に含まれている「砂」の種類を偏光顕微鏡で鑑定することです。



花崗岩偏光顕微鏡写真（上）
熊久保遺跡出土土器（下）
（朝日村教育委員会蔵）



写真中央が花崗岩。薄水色の部分がアルカリ長石で、他に石英も含まれている。
（最大径が2.8mm）

熊久保遺跡出土土器の「砂」の分析

縄文土器、弥生土器や、古墳時代以降の土器とよばれる土器の表面をよく観察すると、赤や白、あるいは透き通った粒が見えます。これが「砂」で、石英・斜長石などの「鉱物」と、安山岩、玄武岩といった「岩石」に分かれます。東筑摩郡朝日村熊久保遺跡から出土した縄文中期中葉（今から約四五〇〇年前）の竪穴住居跡と一緒に捨てられた土器の中の砂を分析してみました。すると朝日村を含む中南信地方に分布する平出皿類A土器には花崗岩や黒雲母・白雲母が多く含まれていました。これらは遺跡西方の鉢盛山周辺に起源をもつと推測されます。これに対し、関東地方から長野県にかけて分布する、指先を粘土に押しつけたような跡のある「貉沢式」（勝坂式）と「大石式」の土器には、安山岩や火山ガラス、黒曜石の仲間のピッチストーンが多数含まれていました。火山ガラスや安山岩は分布する地域が広いので、その起源はまだはっきりしていません。ただ今回の分析で土器の型式によって中の「砂」がまったく違っていることがわかったことは大きな成果といえます。このことから違う場所で作られた土器が同じ竪穴住居跡に捨てられていた可能性が高まりました。今

後、他の遺跡でも同様な分析をおこなうことによって、土器が運ばれたルートや産地の特定がより進むものと期待されます。

広域胎土網の整備

このように土器の種類（型式）ごとに中に入っている「砂」が異なる事例が最近増えてきました。これは当時の人びとが土器を頻繁に交換していた結果とも考えられます。しかしながら、その土器がつくられた地域をもっと明らかにするためには、長野県内さらには日本全国のごとにどんな砂が分布しているのかを、あらかじめ調べることが必要です。各地の地質図も参考になりますが、細かい鉱物や岩石の種類の違いを検討するにはそれだけでは不十分です。そこで川砂や火山灰などの野外調査とともに、各地の土器を数多く分析することで、それぞれの地域で歴史的に使われた「砂」の特徴を把握し、そのリスト（土器胎土網）を作っていくことが大切です。

砂と粘土の分析の併用

土器をつくっているもう一つの素材が「砂」よりも粒が細かい「粘土」（二五六分の一メートル以下）です。「粘土」には、もともと「砂」が入っている場合もありますが、加工を容易にしたり、焼く際のひび割れを防ぐなどの目的で後から「砂」を混ぜることもあるため、両者の産地は同じとはいえません。「砂」の分析とともに「粘土」の化学組成をX線で調査することで、土器の動きはいつそう明確になるでしょう。

研究の窓

信州への学童集団疎開

一九四四年八月、長野県は東京都から約三万人の学童集団疎開を受け入れました。学童は足立区、豊島区、杉並区、中野区、世田谷区からやってきて、県内各地の旅館や寺院を宿舎にしました。学校の代わりにもなつたことから、「学寮」ともよばれました。これらの学寮の決定はきわめて短期間のうちになされています。当時の資料からも、この時の混乱ぶりを知ることができるものがあります。長野県での学童集団疎開の受け入れのようすをみてみましょう。

教育は二の次だった疎開

学童疎開促進要綱が閣議決定されたのは、一九四四年六月三〇日のことでした。以来、学童集団疎開をおこなう区では、学寮探しに奔走します。各県から出された受け入れ可能数にもとづき、区ごとに疎開先の県が決定しました。高遠国民学校（伊那市）の校長木下義男が残したメモには七月二二日に中野区大和国民学校の島田幸三郎がやってきたことが記されています。「赤穂町（駒ヶ根

市）へ旅館調査に行ったが、源屋で割り当ての引き受け先がないために高遠の状況を調べにやってきた」とあります。これに対して木下は、「極秘で県警防課からの照会（受け入れた場合の旅館や寺院等の収容人数など）があつたが、今のところ動きようがない」と答えています。この後、県から正式な依頼があつたのは不明です。中野区では区内の中央本線より北は福島県へ、南は長野県へ疎開することになりました。桃園国民学校を受け入れるために打ち合わせがたびたびもたれます。八月一日におこなわれた打ち合わせでは、小尾庸雄視学があいさつで「教育のことは二の次なり」と言っています。学寮の便所の問題なども後回しで、とにかく学寮の割り当てを決めることが第一に議論されました。一七日には荷物が高遠に到着し、学童が中野駅を出発したのは二二日の夜でした。わずか一か月のうちに学寮を決め、一六〇人が移動することは、とても大変なことでした。なお、打ち合わせの多くは高遠警察署でおこな

われました。警防などの理由で、警察が中心になってまとめていたことがうかがえます。

雑誌『信濃教育』一九四四年一月月号に、上伊那郡のようすについて木下が「各方面に、準備に於て、心構へに於て、連絡處理の問題に於て、意思疎通の點に於て、種々の齟齬や抵抗のあつたことは否み得ない事實であつた」と記しています。

再疎開をした子どもたち

長野県内で疎開生活を始めた子どもたちですが、はじめて過ごす長野県の冬はとても厳しいものでした。疎開の子どもたちを励ますため、村ごとに慰問先を決めて贈り物をすることもありました。一九四五年四月になると、最初の疎開先から別の疎

開先に移動する学寮も出てきました。宿泊先の設備が不十分なことや人数が多すぎて生活しにくいなどの理由から見直しがなされました。今まで学寮にしていた旅館などが空襲などで焼け出された人たちのために使われるようになり、再疎開を迫られる学寮も出てきました。移動先は、今までよりもさらに遠くなることも多くみられました。浅間温泉（松本市）から下伊那郡上久堅村（飯田市）に学寮を移した東京第一師範学校附

属国民学校（東京学芸大学附属世田谷小学校）もそのひとつです。

木下の記録には上伊那郡内の再疎開をした子どもたちのようすについても書かれています。地元の子どもたちともうち解けて生活できている学校がある一方で、トラブルを抱えている学校もありました。薪集めをして体力不足で役に立たないことや、やたらに知識を披露することがあげられています。

一九四五年八月一五日で戦争は終わりますが、子どもたちが東京に戻つたのは一一月になつてからです。そのまま冬を越した学校もありました。世田谷区の光明国民学校が東京に戻つたのは一九四九年のことでした。（田村栄作）



桃園国民学校引率教員中島武男の授業風景
（『中野の戦災記録写真集』より転載）

疎開学寮素描（部分）1945年（昭和20）

東京学芸大学附属世田谷小学校蔵

1945年6月東京第一師範学校は東筑摩郡本郷村（松本市）の浅間温泉から再疎開し、下伊那郡上久堅村（飯田市）の興禅寺に学寮を構えた。素描は学寮での5か月の学童集団疎開の様子を引率教員山本幸一郎が描いたもの。

■行事アルバム

【7月1日 飯山公開講座】



飯山市民館で地域公開講座を開きました。長野日本大学中学・高等学校長長瀬哲氏「飯山城と城下町の移り変わり」、当館総合情報チームリーダー宮下健司「鮭と千曲川—千曲川の漁業史—」の講演に多数の皆様のご参加をいただきました。

鮭と千曲川—千曲川の漁業史—の講演に多数の皆様のご参加をいただきました。

年末年始の特別展のご案内

信州の歴史遺産 I

—新指定長野県宝と歴史館のお宝—

2006年11月25日(土)～

2007年1月8日(月)



11月末から新年にかけて、特別展を開催します。新指定県宝の石器や掛軸、そして豪華な屏風、浮世絵などを公開!! お正月中も開館しています。

■編集後記

子どもたちに焦点をあてて十五年戦争をとらえた秋季企画展が開催されます。ぜひご来館ください。

長野県立歴史館たより 秋号 vol.48

2006年(平成18)9月15日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代清水 科野の里歴史公園内
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail rekishikan@pref.nagano.jp
ホームページ http://www.npmh.net

INFORMATION

インフォメーション

■2006年

10月～12月の行事予定

10月

休館日
2・10
16・23
30

企画展

秋季企画展

戦時下の

子どもたち

—信州の十五年戦争—
9/30～11/12

10/8 講演会①

「母・藤原ていの戦争体験を語りつくす」(仮題)

講師：藤原咲子氏
(作家)

10/15 調査報告会

「長野県内の戦争遺跡」

10/29 講演会②

「戦時体制と学童疎開」(仮題)

講師：荒 敬氏
(長野県短期大学教授)

お話し会

10/21・11/4・11/11

展示解説

10/1・10/22・11/12

親子映画会

11/5

講座

10/7 上田公開講座

考古学講座

10/14 第5回 遺跡探訪会

古文書講座

10/21 初級・上級(第5回)

10/22 中級(第5回)

常設展示替え

二つの縄文文化
須田満親の生涯
善光寺参り
信州の白樺派

11月

休館日
6・13
20・24
27

特別展

信州の歴史遺産 I

—新指定長野県宝と歴史館のお宝—
2006/11/25～
2007/1/8

11/25 特別展講座

「みんなの宝を守ろう」

12/23 わら細工体験

お正月の縁起物をつくってみよう

2007/1/3 特別公演

獅子舞・コマ回しほか
演者：中野哲良氏
(古典芸能家)

展示解説

11/25・12/2・12/9・
12/16・2007/1/6

講座

11/9 考古資料保存処理講習会

やさしい信濃の歴史講座

11/11 第1回【原始】
土器と土偶から見た
縄文人の祈り

考古学講座

11/25 第6回 山の考古学
—東北信地域の山
頂の遺跡—

常設展示替え

豪農の世界

講座

やさしい信濃の歴史講座

12/9 第2回【古代】
国分寺の建立と古代
の仏教

常設展示替え

商人と市

12月

休館日
4・11
18・25
27～31